

## 敗血症バイオマーカープレセプシンの最新の知見について

©内藤 克紀<sup>1)</sup>  
シスメックス<sup>1)</sup>

敗血症バイオマーカー プレセプシンの最新の知見について

演者：シスメックス株式会社 第一エンジニアリング本部

タンパク技術グループ 内藤克紀

敗血症は感染に対する宿主生体反応の調節不全で、生命を脅かす臓器障害を引き起こす。重症化すると（敗血症性ショック）予後が悪く、早期診断および早期治療介入が必須な疾患である。感染特異的かつ早期診断が可能な敗血症バイオマーカーは、適切な治療の選択、治療成績の向上、さらには医療費の軽減にも貢献すると考えられる。

CD14（細菌の細胞壁成分である LPS の受容体）は自然免疫機構を司る分子であり、感染における生体反応と密接に関係している。白川らは、敗血症患者の血中において CD14 の N 末端断片の濃度が特異的に上昇することを見出し、本分子を敗血症の初期に検出されるタンパクとして、プレセプシン：Presepsin（PRE + SEPSis + proteIN）と名付けた。これまで報告されている敗血症のバイオマーカーと異なり、プレセプシンは侵襲の強い外傷・熱傷・外科手術などの炎症の影響を受け難く、臨床症状（重症度）との相関が良いことが報告されている。また、日本版敗血症診療ガイドライン 2016 にも記載され、感染症診断補助検査として推奨されている。今回はプレセプシンの分子の性質や産生機序と共に、最新の知見も併せて紹介する。